

平成23年度新任教員FD研修会ワークショップ報告

著者	嶋 香織
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	32
ページ	83-84
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/10232/17059

平成23年度 新任教員 FD 研修会ワークショップ報告

嶋 香織

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
先進治療科学専攻 腫瘍学講座
腔病理解析学分野

10月25日と27日の二日間にわたり、郡元キャンパスで開催された、「鹿児島大学 FD 委員会主催、新任教員 FD 研修会ワークショップ」に参加しました。以前に勤めていた大学でも、FD 研修会に何度か参加した経験はありますが、その時は歯学部の中で行われ、内容も歯学教育に関するものでした。全学を対象とした研修会であること、教育の現場を離れて年数が経っていることから、FD 研修の記憶もすっかりなくなっており何をやるのだろうかと少し不安な気持ちで参加しました。

最初の日には、「鹿大生の実態」として、鹿大生へのアンケート調査結果とそのまとめの講義を聞いた後に、「各教員が経験した学生の学習上の問題」と「学生の望ましい学習態度、習慣とは」についてグループ討議を行いました。グループは、専攻、年齢、教育経験、役職もさまざまな教員で構成されていました。他大学や企業、公共機関での勤務の後に鹿児島大学へ新任されてきた、教育経験の豊かな先生方のお話を中心として討議が進められました。与えられた課題には沿わずに自分の経験を自由に話したので、時間内に終わるか少し心配でしたが、話を聞き意見を出し合うこと自体は楽しく、私も、記録係だったにもかかわらず、自分の拙い教育経験やアメリカで接した学生のことなどを話しました。つい数か月前までは大学院生という学生側の立場だったという教員は、学生にとって motivation の上がる教育内容は、やはり大人数の講義より少人数の研究室配属だった、という意見を出されました。それでは、研究室に配属されるまでの基礎知識、教養の習得のあり方は今の形態でいいのか、という話も含め、討議は、学生に望む態度のみならず、学生の保護者の大学教育への期待、学生の描く将来像の曖昧さ、その起因となっている現在の社会情勢の話にも及びました。また、学生の能力の高さや学習態度は

変わっていないけれど、大学側が社会とともに変わってしまった結果として、しわ寄せが学生に来てしまって、学生が真面目になりすぎている、という意見に賛成する教員がほとんどでした。

最後の発表では、試験や評価の仕方を具体的に述べたグループもありましたが、私たちのグループでは学生に望む、というよりは、学生が望ましい学習を行うために、教員も含め大学全体がどう取り組むべきか、大学が社会と学生教育をどう結びつけていくべきか、というかなり広い視野でのまとめとなりました。

この1日目には、他のグループの発表も参考になりましたが、自分のグループの討議の中で、文系理系を問わず、教員自身も社会の変化に適応していかなければならない現実と、自分がいくつになっても学生の目線にならねばならないというたいへんさを身にしみて感じたことも、私にとっての収穫となりました。結局のところ、教育の現場では試行錯誤ということになってしまうかもしれませんが、大学側の規則の変更（出席や成績評価など）に対応しながらも、自分なりに学生に伝えたいこと、知ってほしいことを、教員が個人的に工夫しながら教育活動を行っていくことしかできないのだと思いましたし、教員それぞれの日常の工夫を、これからも分野、専攻を超えて、このような討議という形で、時々、発表し合い、フィードバックできればよいと考えました。

10月27日の2日目は、1日目と同様の形式でワークショップが行われました。「成人の学び」という講義があり、その後、前回とは異なるメンバーで構成されたグループで、「各教員が経験した指導法による学生の学びの変化」と「望ましい教員の態度、教育方法とは」という課題で討議を行いました。今回は、課題に沿う形でグループメンバーの一人ずつが意見を出しま

した。前回より若干メンバーの平均年齢が低くなって
いたせいか、経験談というよりは現状報告会という形
になりました。医療系、技術系の教育では、実習の形
を工夫することや、問題解決型の演習を取り入れるこ
とで、多くの学生の学びの態度が積極的になり効果的
であった、という報告の一方で、文系の教育では、な
かなか手を動かす作業がないことや、そもそも、将来
の職業に結びつかないかもしれない講義や演習に、興
味を持ってもらうこと自体に苦労があるようでした。
医学、歯学、教育学部などで行われるのは、資格試験
に直結する教育であり、学生の描く将来像が具体的な
ので、学びに対する motivation は他学部よりも高く、
実は苦労が少ないということを確認しました。(意見
としては出しませんが、資格試験に関係ない一般教
養を身につけようとし、という一面を感じるこ
とが時々あります。そのことは文系の学生に通じる
こともあるのではないかと思います。これについては、
また個人的に考えたいと思います。)

討議をすすめるうちに、知識を得るために、教員に
よる講義という形態は本当に必要なのか、というこ
ろに話が及びました。「学び」は一人でもできるもの
ですが、様々なレベルの人が同じように知識を得て、
それを深め、様々な知識とリンクさせる場として、ま
た、特に自然科学は毎日のように新しい発見、知見が
発表されていますから、その情報の共有の場として、
クラス、講義は必要で、教員はその場において、「学び」
の助けをする、という考えてみれば当たり前のことが
結論となり、このことをまとめとして最後にグループ
の代表が発表しました。

2日目のグループ討議の最後にメンバーの一人が、
「今回のようなFD研修会を繰り返すことで、教員の
存在する意義を再認識しないといけないですね。」と
発言しましたが、今回の研修会に参加した感想は、そ
の一言に尽きると思いました。

2日間とも短い時間でしたが、よく計画された研修
会でした。また、参加した教員のバックグラウンドは
様々でしたが、たくさんの経験談を聴くことができた
こと、理論的な討議を行えたことは、私にとってたい
へん有意義でした。毎日の業務に追われていると、つ
い大事なことを見失っていたり、形やスケジュールに
ばかりとらわれていたりするものですが、教員は学生
の学びの手助けだけでなく、自身もまた毎日学んでい
きながら、変化する社会の状況や要請に対応しなけれ
ばならないのだということに、改めて気づかされまし

た。きっと、大学という制度を作った大昔の偉大な先
人たちは、研修会などせずとも、そのような思いを持っ
て、日々、学生たちと過ごしていたのでしょう。大学
という変容してきたシステムが、これからも変わり続
けることは間違いありませんし、社会から教員の必要性
の有無を問われる日も来るかもしれないとも思われま
すので、大学や教員の存在する意義は何か、という
大げさですが、原点を、研修会を通じて考えてみるこ
とは、全ての教員にとって必要なことではないでしょ
うか。

1日目の討議の中で、「最初の講義の中で、大学で
過ごす以外の時間を、部活動もアルバイトもしない学
生が少なくないという結果を示していたのですが、一
体、何をしているんでしょうか？」という疑問を投げ
かけたのに対し、他の教員が口々に、強制的な出席管
理や予習復習の励行などで学生が大学に拘束されてい
る時間が昔よりも長くなり過ぎ、その他の活動をする
エネルギーを大学に奪われている、と述べていたのも
印象的でした。本当に学生に望ましいのは、今の教育
の形態なのだろうか、自分たちが学生の頃のように、
もっと緩くてもいいのかもしれないけど、それでは社
会の要請に適應しないし、第一、保護者が「大学が学
生を放置している。」と電話してくるしね、と、これ
にも様々な意見が出されました。上に述べたように、
学生、大学を包括して社会が変遷していく以上、結論
は出るものではありません。このようなFD活動を通
して、また教育学という研究の結果として、現在の大
学教育体系が存在するのでしょうか、各学部のカリキュ
ラムも当然ながらその延長線上にあり、教員のコンセ
ンサスを得て成り立っているものだと考えます。私自
身は、教育の経験も少なく、モデルとされるカリキュ
ラムについて積極的に学んでいる訳ではありませんの
で、これから少しずつ学び、改善すべき点や、変えて
いかなければならないという点について、考えていき
たいと思います。歯科医師を育成することが、歯学部
の教員である私の務めではありますが、専門家を育
ると同時に、その専門家もその時代に属する社会の一
員になることも伝えなければならぬと思いますし、
また、これは主に大学院生になりますが、将来、大学
教員という職業を選ぶことになる学生たちには、教員
の存在意義とは何なのか、社会で求められていること
は何であるのかを伝えていきたいと思います。

鹿児島大学での教育の仕事は、まだまだこれからで
すので、FD研修会で経験したことを振り返り、また他
の研修にも参加しながら、取り組んでいきたいと思
います。